

# 昭道報

Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

第6号

平成13年10月20日発行

<発行所>

関西合気道競技連盟広報部

<発行責任者>

中村芳勝(広報部長)

<編集>

昭道報編集係

## 合気道の呼称について

師範 成山哲郎

2001年は富木謙治先生の生誕百年という記念の年にあたります。また本年十月には第四回国際合気道競技フェスティバルが大阪の舞洲アリーナで開催されますので、我々の合気道にとつて大変重要な一年であると言えましょう。この機会にあたって、皆様には是非とも知っておいて頂きたい富木先生の御遺志があります。

日本合気道協会が発足した当初に比べ、最近では国内外を問わず合気道人口も増加し、インターネットなどによる合気道の情報量も増大したため、日本合気道協会の目指す合気道を紹介する機会も増えてきました。その際に、一般の方々のみならず協会会員の中にも富木合気道、または富木流合気道と呼ぶ方が少なくありません。しかし富木先生から、合気道や武道に対する幅広いお考えと熱い思いを伺っていた私としては、これらは何としても避けたい呼称なのです。

富木先生は、ご自身が心血を注がれた合気道に御自分のお名前を冠することに對して、非常に難色を示されておられました。

富木先生は植芝盛平翁から最

初に八段を授かるなど、盛平翁の高弟のお一人でありましたが、翁が亡くなられた後に合気会本部道場で当時の合気会幹部から、活動に對する非難や批判を受けられ、合気道からの名称変更等を要求された事がありました。その時のお話をなさる度に「私の師匠は植芝盛平先生お一人であり、翁先生以外には誰も私を破門には出来ない」と強い口調でおっしゃられ、そして「富木流」又は「富木システム等の名称を用いるように要請されたことに対しては、とても厳しい表情で「私は決して一流一派をつくるために競技化を目指しているのではない」と毅然とした態度を貫かれ、切々と持論をお話になつた事が思い出されます。

富木先生は、何故ご自身が目指した合気道にご自分の名前をつけられる事を、そこまで拒絶されたのでしょうか。そこには先生の合気道や武道に對する、真摯で高邁なお考えがあつただと思えます。

ある時、先生は嘉納師範のお名前を挙げられて「嘉納先生は柔



道を創始し、武道の現代化を目指されたが、ご自身の築かれた柔道を、決して嘉納柔道とはおっしゃらなかった。」

とお話になりました。個人の名前を付することで、却って競技者の視野を狭め、頑なな旧態依然とした武道となつてしまふ、というお考えが先生の胸中にあつたように思います。

富木先生は合気道競技の発展を「自身固有の成果として誇るのではなく、合気道全体の発展につながらずと信じて、競技化を目指しておられました。この道程なくしては合気道の現代化は為し得ないのだ、という強い意志をお持ちでした。こういったお考え故に先生は、逆の意味で名称に拘りを持たれていたのではないのでしょうか。

この先生の考え方が我が々の合気道に對する姿勢であり、今後も見失ってはならない根本的な考え方であると、私は思うのです。たかが呼称と思われ方もおられるかもしれませんが、ここにも富木先生の思想が生きているのだという事を、どうか忘れないうで頂きたいと思ふ次第です。

### <第6号の目次>

「合気道の呼称について」 成山 哲郎 師範	P1
「第四回国際合気道競技フェスティバル特別寄稿」 内山 雅晴 理事長 / 成山 哲郎 師範	P2
「寒稽古を終えて」 酒井 進之助	P3
「寒稽古を終えて」 安部 隆宏	P3

「合気道上達秘伝」 安居 隆	P4
「御挨拶と門下生としての一言」 木下 大樹	P4
「もやもや解決 - 取に對する受とは? -」	P5
「 ってこんな人」(松下悦子さん)	P5

# 富木先生生誕100年

昭道館理事長 内山 雅晴

富木先生、百才になられておめでとございます。

御生前の思い出は本当に沢山あります。先生が早稲田大学を卒業されて後、私達の大阪に御暇があれば来られまして、合気道の御指導をして戴くのでございます。講道館で柔道をしておられた先生の親友で西村秀太郎先生の御紹介と、同じく先生の御親友 大阪の柔道家で浜野庄平先生に御相談し、大阪で道場を初める様になったのでござい

ます。富木先生の中央道場として、私の考えた技を全て、昭道館に残すと申されました。昭道館道場の出発でございます。当初は実技の指導は大庭先生初め大学の部員の方々、又、合気会の小林先生も来ていただきました。成山師範も卒業後、約六年間小林先生の内弟子としてご指導戴きました。富木先生は大阪に居られる時は、道場と御泊まりは私共の家でございます。食事の時又は御寝みになる迄、御暇があれば合気道の話ばかりでございました。先生が合気道を初められてから東條英機大将に呼ばれて関東軍又満州建国大学

教授として終戦まで合気道を御指導された思い出は何度聞いても尽きる事はございません。夜御寝みになる時も枕元にノートと筆を置かれて夜中に目がさめて思いつくとノートに記されるのでございます。寝ておられる時も合気道を考えて居られる時と先生は神様の様な方だと思えます。



## お知らせ

昭道館本部のメールアドレスとホームページアドレスが変わりました。アドレス帳やお気に入り/ブックマークに登録されている方は、変更しておいてくださいね。

E-mail: shodokan@nifty.com

URL: <http://homepage2.nifty.com/shodokan/>



## 祝 第四回国際合気道競技フェスティバル



### ご挨拶

大会実行委員長 成山 哲郎

本大会の実行委員長として一言ご挨拶を申し上げます。

本年は合気道競技の創始者である富木謙治師範の生誕百年にあたります。同時に新世紀初めての国際合気道競技大会開催年であり、我々にとっては実に意義深い年であると言えます。その記念大会を、富木師範が初めて専門道場として昭道館を創設した、大阪において開催できますことは大変な喜びでありま

す。

富木師範の夢は、国内外にとられず「意識の統一」を図り、合気道の競技化によって理想の合気道を追求、発展させることでした。師範はお亡くなりになる直前まで海外指導への意欲を示され、その必要性を繰り返しお話になられました。この師範の御志を心に抱いて、師範が亡くなりになられた三年後の1982年より今日まで、毎年海外に足を運んでまいりました。今は世界的に知られている師範のまともめられた稽古システムも、当初は言葉の壁による困難

や誤解により、ご理解頂けないこともありました。しかしどんな時も「良いものは必ず広まる」という師範の言葉が私の心の支えとなってくれました。また、当初よりご理解ご協力下さった海外の指導者の皆様方への感謝と信頼の気持ちは、決して忘れることはできません。師範が開催を信じていた国際大会も今回で第4回を数え、参加国・人数ともに着実に増加しており、実力も伯仲し、真の国際合気道競技大会に育ってまいりました。「合気道をオリンピック種目に」という師範の遠くて

熱い夢が、現実の目標として掲げられる時代になったと、私は思っています。尚、今大会より種目別混合団体戦が公式種目として採用されました。これは富木師範が創案された稽古内容や、師範の思い入れの深い護身の形を組み込んで、合気道全体を通して競い合うことが出来るように工夫されたものです。また今大会では、招待演武として、講道館護身術と日本剣道の形の演武をお願い致しました。このような貴重な演武をご披露頂けるのは、富木師範の、合気道の真ならず武道全般に対する高邁な思想の賜であります。師範の生誕百年を記念する大会に何よりもふさわしい内容であると言えますしよ。

最後に成りなしたのが、本大会開催のために本当に多くの方々のご支援ご協力を頂きました。心より感謝致しております。準備に日夜ご苦労されたスタッフの皆様、審査・審判員の皆様、そして海外からご参加下さいました多くの道友の皆様、本当にありがとうございます。何より演武をご披露頂きます先生方はじめご来賓の皆様には、ここに改めて御礼申し上げますとともに、今後より一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

### 寒稽古を終えて

昭道館 酒井 進之介

・稽古内容について、「各論」

・寒稽古を踏まえ、今後どういった練習が必要か「総論」

・寒稽古の意義：嘉納治五郎「寒稽古奉行の趣旨」を読んで思うこと

・稽古の内容について《各技の難しかったところと、自分の考える技のポイント》

（紙面の都合により省略させていただきます。）

・寒稽古を踏まえ、今後どういった練習が必要か

どんなに複雑に見える技でも、分解すれば運足と手刀動作のポイントとなり、その動かし方と攻撃側のバリエーションによって様々な技が存在している。従って技を練習する際には、まずその形を覚え、それがどういった足の動きと手刀動作によって成り立っているのかを把握することが前提となる。師範や指導員の方に前で教えていただいた時にはその部分をしっかりと見極めることができるように、注意して見ていきたい。また手首技8本等の稽古で感じるのは、いくら形を覚えても

技をかける相手の部位（手首、肘、顎、こめかみ等）を正確にとらえた技をかけなければ、似てはいるがその技をかけたことにならないのではないかとということである。例えば相構え順手取りの小手返しを逆構え片手取りから行う場合、いったん運足と手刀で下段に崩してから相構えの手で順手に握り、もう片方の手を補助手にしてかける。当然相構えの手がメインになり、補助手はあくまでも補助の役割でしかないはずであるが、実際に技をかけるメインの手をメインに使うことがけっこう難しい。どうしてもその場のとりやすい方の手がメインとなってしまうのである。技を形として正確に覚えることは、これから指導者を目指す者のあるべき姿勢でなくてはならない。これからは日々の稽古の中で正確に相手の目的とする部位をとることができるように、意識して稽古していききたい。

7日目の日曜日に、寒稽古の総復習の意味もあり、前で演武させていただく機会があった。意識するようにしているが、私は受けをとる際、「相手の技を受ける」という姿勢に欠けているのではないかと感じることがよくある。相手がかける前に跳んだり、受けたり、崩れたりしてしまふケースなどがあり、大変恥ずかしい。多くの人が見ている前で下手な受けの取り方だけはしないよう、今後気をつけ方を尊敬しています。



ていきたい。

・寒稽古の意義：嘉納治五郎「寒稽古奉行の趣旨」を読んで思うこと

寒稽古期間中に、嘉納治五郎講道館師範が講道館の寒稽古奉行に際して示した文章を読ませていただいた。講道館では1月という最も寒い30日間、しかも早朝の午前5時から寒稽古を行うそうである。「寒稽古30日間を皆勤しよう」とすれば、何事

### 寒稽古を終えて

昭道館指導員 安部 隆宏

平成13年度の昭道館恒例による寒稽古が1月12日(金)から1月20日(土)までの9日間執り行われました。連日、大変寒い日が続く中、80名近い方々が参加されました。

寒稽古というのが稽古とは別に試練というものがあるように思います。1つは眠気に負けないうこと、もう1つは寒さに打ち勝つことです。稽古中は人数も多く、動くということでは寒さは気にならないですが、道場に行くまでが大変です。僕は電車を利用するのですが、朝の始発の電車は暖房がかかっている筈もなく、外とほぼ同じ気温になっており、そこで寝てしまつと凍死してしまうのではないかと考えるほど冷えております。

寒稽古に参加するのは今年で3回目です。しかし今年には指導員になって初めての寒稽古とあって、何から何まで新鮮であったと言うか、緊張の毎日でした。まず朝起きる時です。目覚まし時計はちゃんとかけているのですが、目を覚ました時刻にすでに稽古が始まっているのではないかとと思うと、恐ろしくて何時間か置きに目を覚ましてしまいました。

しかし一番緊張したのは稽古中でした。成山師範と呼ばれ、みんなの前に出て、言われた技をやってみようとするのです

が、いざ思い出すととても緊張のためか記憶の引き出しから全然技が出てきませんでした。あとで師範に技をやっていただき、思い出します。「思い出す」ということは、昔は覚えていたということ、分らない技をそのままにしておいたと感じて深く反省しています。教えていただいた技を忘れないために十分に復習し、次に師範が今回寒稽古でやった技をするように言われても、すんなり記憶の引き出しから出せるようにしたいです。

昭道館の方々は自分の意志で寒稽古に参加しています。でも僕はどうであったか。今年で3回目ですが、何処かで行かなければならないという義務というものに縛られているような気がします。特に学生はこれに当たっているのではないしょうか。(もちろん自主的に来ている学生もいるが)学生の場合はそれでかまわないと思います。正月でたるんだ性根を入れ替えるためには一番適していると思います。しかしこの義務を越えて自分の意志で行った時、初めて寒稽古に参加したといえると思えます。僕も来年からはこの義務に縛られるのではなく、自分の意志で寒稽古に参加できるようにします。

# 伝秘達上道気合 隆 安居

20世紀は、物質文明の時代であり、破壊力のある空手などが流行りましたが、精神文明の開ける21世紀は合気道の時代であります。

そこで、合気道上達の秘伝を紹介いたします。類は友を呼ぶという言葉のとおり、考え方が似たものや同じ趣味の者同士集まるという法則があります。自分が

こんな人になりたいと思ふなら、既にそのようになっている人に近づくと、早道です。例えば、勉強ができるようになりたいなら勉強できる人と仲良くすること、賭け事に強くなりたいなら賭け事に強い人と仲良くすることです。気楽に付き合える人達とは狭い部屋にいても苦にならないが、気を使わなければならない人とは一緒にいることは窮屈に感じ、初めのうちは辛いですが、飛び込んでいくことで、やがて慣れてきた頃には、半分以上なりたいたい自分になっています。乱取が強くなりたければ、強い人とできるだけ多く乱取をしたり、型が上手くなるには型の上手い人とたくさん練習することです。

そして、さらに合気道を深めたいなら、成山師範のそばにすることが最高の修業法です。受けをとるのはもちろん、技の練



## 大阪商業大学合気道部 初代主幹 木下大樹 「御挨拶と門下生としての一言」

「目標達成への思いを強く持ち続けられればその目標は必ず達成することが出来る。」これは私が大学に合気道部を創る際に成山師範より賜った言葉です。誰にも負けない合気道に対する情熱を持って世界に合気道を広めておられる師範の確信があるようなその言葉は、不安で何の行動を起こすことも出来ずにいた私に大きな希望と勇気を与えてくれました。その時から現在まで、私は師範の言葉を胸に合気道部を創る事だけを考えて全て



の力を注ぎ込んでまいりました。そして今年1月、我々のクラブは念願であった部への昇格を果たすことが出来ました。本当であれば多くの問題が生じるはずであるにも関わらず、私達が無事自由なく合気道に打ち込む事が出来たのは成山師範をはじめとする昭道館の皆様方に支えていただいたおかげであります。心よりお礼申し上げます。私は今後監督として部に残り、皆様方に頂いたご恩を忘れることなく更なる合気道部の発展を目指し精進してまいりたいと思っております。今後変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。最後に昭道館の門下生として一言申し上げます。最初に書いた師範のお言葉は、昭道館師範のお言葉であります。そして師範の目標とは合気道競技の普及であり、その目標は我々門下生の目標であります。師範のお言葉どおり門下生の一人一人が、その目標に対する思いを強く持てば合気道競技をどこまでも発展させることが可能であると思えます。そのために、「大阪での国際大会を大成功させるように力を合わせてがんばりましょう。」合気道競技が国体やオリンピック種目となる日を夢見つつ、この文章を終わりたいと思います。

習以外でも行動を共にして、師範の思われることを先に読んで、師範や道場生の人達に喜んでもらえるように常に気を配ること、自分の気が師範の気と同化してくるので技も師範に近づけるのです。実際、専任指導員として常に師範のそばで数年間修行した者が数名いますが、彼らはその職につく前よりも飛躍的に上達しました。合気道に限らず、何事でも人と仲良くしたり教えたり習ったりして、自分が憧れる人の色(「カラー」)になったり、人を自分の色に染めることができるのです。話がそれますが、大本尚武館の出口信一先生が合気道を習う前、出口直日教主が普通なら大本教信者である先生の合気道を勧めるところが、富木先生に習いなさいと言われたそうです。また、今から10年前、ある神道修行する若者の団体が昭道館に少し習いに来たことがあります。その団体のリーダーに聞けば、自分達が最も尊敬し世界一の霊能者であると信じている先生に何か武道を経験したいと伺いを立てたところ、空手や拳法は人をやつつける気持ちではないと強くない修羅の面があるので合気道がよいと言われ、数ある道場の中から成山師範の背後の霊界が最も美しいからと昭道館を選んだそうです。このようなことから、昭道館の道場生は合気道の稽古を通じてこれから益々運が良くなる人の集団であるといえます。その中でも大会や行事などで縁の下力持ちとなつて頑張つてくれる人達は、まさに周囲に幸福の輪を広げて行く光の戦士であります。どうぞみんなで力を合わせて、成山師範と昭道館を盛り上げて行きましょう。

もやもや解決 - あなたの疑問にお答えします。 -

Q 「取に対しての受」をどのように位置付け、どのように字  
べばよいのでしょうか？



今回は中川世一先生に解説していただきます。

A この問題に答えるには、前提である「演武」から考える必要  
があると考えます。「演武」とは何か。書いて字の如く「武」  
を「演」じること。ですから「武」を表現しなければならぬ。  
「武」とは、この場合は、「武芸」「武術」と考えます。それ  
を表現するには、取の技を受けるだけが受の役割ではなく、真  
剣な攻撃を仕掛けていき、それに対応した取の技を受けること  
です。と簡単に書きましたが、真剣な攻撃をして、それに対応  
する取の本当の技に対して身の安全を確保するのは至難の技で  
す。この攻撃、受身の差が本当の演武であるか、そうでないか  
の基準だと考えます。

受身が上手になるには、正しい方法を知る事は大切ですが、  
知る事よりも数をこなす事だと考えています。そして、今の力  
量にあつた演武を、より多くの人の前で披露して行く事が大切  
な事だと考えます。披露を続けていると、思いもかけない力が  
発揮できる事があります。それが自分の力になるように稽古を  
重ねていけば、色々な問題意識が生まれて来ます。そして、そ  
れを解決していけば、一歩々々前進している自分を感じる事が  
出来ます。これは楽しい事です。

合気道に先に出会った我々が、そのお手伝いを出来れば嬉し  
いと思います。最高の演武を目指しつつ、お互いに稽古に励み  
たいものです。



今回のかわいい挿絵は、  
和田友則さんに描いていた  
できました。この場をおか  
りしてお礼申し上げます。  
ありがとうございます。

(編集係)



今回は、昭道館本  
部の稽古仲間から  
「母」と慕われて  
いる松下悦子さん  
の素顔？をご紹介します。

編集係「さんの素顔を暴露  
してください。稽古後のお酒  
の席で印象に残っている、  
さんの本性を紹介して頂き  
たいなあ。」

松下「ありすぎて・・・(笑)」

今後のこともあるので、式段  
以上の方々は遠慮して、と思  
いましたが・・・去年、東京  
へ、飛んだF女史は、演歌が  
嫌いらしくて、忘年会二次会  
のカラオケボックスの中で、  
演歌連続のあと、とどめの「お  
富さん」で、ことごとく熟睡  
してしまいました。」

編集係「松下さんの道場以外での  
顔を紹介してください。」

松下「ありすぎて・・・(笑)ボ  
ビュラーなのは、息子4人の  
母です。」

編集係「合気道をはじめたきつ  
けは？」

松下「30歳をすぎて、体力が落  
ちてきたので、  
ちよつと体操でも、ついでに  
護身も出来たらいいな」  
な〜んで、そんな、軽い気持  
ちでした!？」

編集係「合気道のことが好き!  
いうところを教えてください」

松下「室内である。声を出さない。  
走らないのに汗をかく。?  
上手く技が出来る、相手の体  
格が関係なくなる。」

編集係「最後に自己PR等のメ  
ッセージをお願いします。」

松下「もし、なにかの間違いで、  
副審をすることになったら、  
選手のみなさん、ごめんなさ  
い!

「場外」と「見えません」は、  
自信あります。」

編集係「松下さん、松下さんら  
しいメッセージをありがとうございます  
ございました。お礼(?)に  
松下さんの笑顔を公開させて  
いただきます。」



柱の傷は  
おとしのー

5月5日の  
背いくらべー

稽古熱心なMさんから替え歌  
が届きました。

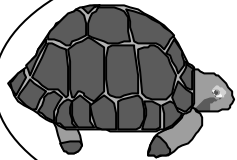
背中いきーずーは  
おとしのー

がつかの  
技くーらーべー

ちよつと一息つけましたか?



♪ 背中のいきーずーは  
おとしのー  
〇がつかの  
技くーらーべー♪



# けっこう 健康?

昭道館一般の部で稽古している人にはシャイな人が多いのか、お酒を交えてのコミュニケーションが大好き。お酒には不思議なパワーがあり、適量を飲むと体にもいいと言われています。が、やっぱり飲みすぎると毒になってしまいます。  
ところで、適量ってどれくらいなのでしょう。

アルコールの半分以上は肝臓で分解されます。その処理スピードは個人差がありますが、体重60~70kgの人で1時間におよそ7gといわれています。

ところで、アルコールの含有量は、ビール大ビン1本、日本酒の1合がほぼ同じで約23g。となると、このアルコールが分解処理されるまで23÷7=3.3なので約3時間ということになります。

日本酒2合を飲むと6時間以上かかります。お酒を飲んで6時間睡眠をとると丁度分解される計算になりますが、肝臓は眠らず働きつづけなければならぬということです。

[お酒の酔い加減 アルコール血中濃度と酔いの状態]

飲酒量(ml) × アルコール度数

アルコールの血中濃度(%) = -----

833 × あなたの体重 [ ]kg

個人差が大きいので、酔いの状態についてはあくまでも標準的な状態ということで参考にして下さい。  
くれぐれも飲みすぎないように...

爽快期(0.02~0.04)  
気分が爽やか  
皮膚が赤くなる  
陽気になる  
判断が少しにぶくなる

ほろ酔い期(0.05~0.10)  
ほろ酔い気分  
手の動きが活発になる  
抑制がとれる  
体温上昇、脈が速くなる

酩酊初期(0.11~0.15)  
気が大きくなる  
大声でがなり立てる  
怒りっぽくなる  
立てばふらつく

酩酊期(0.16~0.30)  
千鳥足  
何度も同じことをくり返ししゃべる  
呼吸が速くなる  
吐き気、嘔吐

昏睡期(0.41~0.50)  
揺り動かしても起きない  
大小便はたれ流し  
呼吸はゆっくりと深い  
死亡

泥酔期(0.31~0.40)  
まともには立えない  
意識混濁  
話が支離滅裂

## 編集後記

編集係一同(編集長 山形忍)

前号(第5号)を発行してから早一年が経ちます。復活号といながら、そのまま、また休眠してしまうのではないかと心配の声もちらほら。しかし、無事、第6号を発行することができました。

当初、第6号の原稿締めきりは今年の2月となっていたので、あわててご寄稿いただいた方、申し訳ございませんでした。実は編集係内では第6号 1版(暫定版1号)から始まり、第6号 6版(暫定版6号)までバージョンアップが重ねられ(単純に考えると毎月内部発行されていた計算になります)、なかなか発行に至りませんでした。徐々に 版の数を減らし、よりスピーディーな発行をめざしたいと思っております。

今回は国際大会ということで特別記事もあり、前号よりかなりボリュームアップしています。いかがでしたか? みなさまのご意見や各コーナーへのご寄稿をお待ちしております。ぜひ、スタッフまでご連絡ください。

《日本語版スタッフ》

山形忍、伊達由美子、萬谷久美子

《英語版スタッフ》

Alan Higgs、David Graves

E-mail:mancha@f8.dion.ne.jp